

ひふみ神示5 病氣

目覚めたらその日の生命お預かりしたことを○（神）に感謝し、その生命を○（神）の御心のま
 まに弥栄に仕えまつることに祈れよ。○（神）はその日その時に何すべきかについて教えるぞ。明
 日のことに心使うなよ。心は配れよ。取り越し苦労はするなよ。心配りはせなならんぞ。
 一二三の食べ物に病無いと申してあろがな、一二三の食べ方は一二三唱えながら嚙むのざぞ、四十
 七回嚙んでから呑むのざぞ、これが一二三の食べ方ざぞ。○（神）に備えてからこの一二三の食べ
 方すればどんな病氣でも治るのざぞ、皆の者に広く知らしてやれよ。心の病は一二三唱えることによ
りて治り、肉体の病は四十七回嚙むことによって治るの座ぞ、心も身も分け隔てないのであるが、
 わかるように申し聞かしているのざぞ、取り違い致す出ないぞ。

（ひふみ、よいむなや、こともちろらね、しきる、ゆあつわぬ、そをたはくめか、うおえ、にさり
 へて、のますあせゑほれけ。）

食べ物頂くときはよくよく嚙めと申してあろが、上の齒は火だぞ、下の齒は水だぞ。火と水と
 合わすのざぞ。かむろぎかむろみぞ。嚙むと力生まれるぞ。血となるぞ、肉となるぞ。

キが元と申してあろうが、キが飢え死にすると肉体飢え死にするぞ、キ息吹けば肉息吹くぞ、○
 （神）の子は○（神）のキ頂いているのざから、食うもの無くなっても飢え死にはせんぞ、キ大き
 く持てよと申してあろが、キはいくらでも大きく結構自由になる結構な○（神）のキざぞ。臣民利
 巧無くなれば○（神）のキ入るぞ、○（神）の息通うぞ、凝りかたまとコリになって動きとれん
 から苦しいのざぞ。

日の出の○（神）様お出ましぞ、日の出は、イの出であるぞ、キの出であるぞ、わかりたか。めん
 めめんめに心改めよと申してあろがな、人民というものは人に言われて腹の立つことあるものじゃ、
 腹立つと邪氣起こるから、めんめんめに改めよと、くどう申すのじゃぞ。

どんなことがあっても不足申すでないぞ、不足悪ざぞ、皆人民の心からぞと、くどう申してあろ
 がな、人民、キから起こってきたのざぞ、私の難儀、我が作るのざぞ、我恨むよりほかないぞ。

神は愛となって現れ、真となって現れるのであるが、その根はよろこびであるぞ。神の子は皆よ
 ろこびじゃ。よろこびは弥栄ぞ。じゃがよろこびのも正流と外流とあるぞ。間違えてならんぞ。正流
 の歡喜は愛の善となって現れて、また真の信となって現れるぞ。外流のよろこびは愛の悪となって
 現れるぞ。いずれも大神の現れであること忘れるなよ。悪抱えて抱き参らせて進むところにマコト

の弥栄あるのであるぞ。神は弥栄ぞ。これでよいと申すことはないのであるぞ。大完成から超大完成へ向かって常に弥栄しているのであるぞよ。宇宙はすべてにおいても、個々においてもよろこびからよろこびに向って呼吸しているのであるぞ。よろこびによって創られ、よろこんでいるのであるぞ。故によろこびなくしては生きないぞ。合一はないぞ。愛は愛のみではよろこびでないぞと申してあろう。真は真のみではよろこびでないぞと申してあろが。愛と真と合一し、キ（父韻の働きが始まる、つまり生まれ出て）するところに、陰と陽と合一し、弥栄（呼吸）したところによろこびあるのぢやぞ。

病、ひらくことも、運、ひらくことも、皆己からぢや、と申してあろう。誰でも、何でもよくなるのが神の道、神の御心ぢや。親心じゃ。悪くなるということはないのぢや。迷いが迷いを生むぞ。もともと病も不運もない弥栄のみ、よろこびのみじゃ。神がよろこびじゃから、その生んだもの皆よろこびであるぞ。この道理よくわきまえよ。

表ばかり見ているからわからんのじゃ。水晶の心なれば三千里先のこともありやか。人民というものは奇蹟を見ても、病気になっても、中々改心できんもんじゃ。それは外からのものであるからぢや。まことの改心は、中の中の、のキ戴いて、ホッコンの改心出来ねばならん。死後の生活知らずことはよいなれど、そのみによって改心せよと迫るのは悪のやり方。奇蹟を見せ、病気を治してやるのもよいことじゃが、そのみによって改心迫ってはならん。そのみで道を説いてはならんぞ。そんなことぐらいでマコトのホッコンの改心が出来らば、人間はとうの昔に改心して御座るぞ。今までのような宗教は亡びると申してあろうが。亡びる宗教に致して下さるなよ

病あるかないか。災難来るか来ないかは、手届くか届かないかで分ると申してあろがな。届くとは注ぐことぞ、手首の息と腹の息と首の息と頭の息と足の息と胸の息と臍の息と脊首の息と手の息と八か所十所の息合っていれば病無いのぞぞ、災難見ないのぞから、毎朝神拝みてから克く合わしてみよ、合っていたらその日には災難無いのぞぞ、殊に臍の息一番大切ぞぞ、若しも息合っていない時には一二三唱えよ、唱へ唱へて息合うまで宣れよ、何んな難儀も災難も無くしてやるぞ、この

おほかむつみかみ
 方意富加牟豆美神であるぞ。神の息と合わされると災難、病無くなるのぞぞ大難小難にしてやるぞ、生命助けてやるぞ、此のことは此の方信ずる人でないと誤るから知らずでないぞ、手二本足二本いれて十柱ぞ手足一本として八柱ぞ、此のこと早う皆に知らしてどしどし安心して働くようにしてやれよ。飛行機の災難も地震罪穢れの禍も大きい災難ある時には息乱れるのぞぞ、一二三祝詞と祓え祝詞と神の息吹きと息と一つになりておれば災難逃れるぞ、信ずるものばかりに知らしてやりてくれよ。

一二三祝詞

ひふみ よいむなや こともちろらね しきる ゆいつわぬ そをたはくめか うおえ さりへて
 のますあせゑほれけ

・その 16 ひふみ神示 5 サブタイトル病気

ひふみ神示 5 病気

「目覚めたらその日の生命お預かりしたことを○（神）に感謝し、その生命を○（神）の御心のままに弥栄に仕えまつることに祈れよ。○（神）はその日その時に何すべきかについて教えるぞ。明日のことに心使うなよ。心は配れよ。取り越し苦労はするなよ。心配りはせなならんぞ。一二三の食べ物に病無いと申してあろがな、一二三の食べ方は一二三唱えながら嚙むのざぞ、四十七回嚙んでから呑むのざぞ、これが一二三の食べ方ざぞ。○（神）に備えてからこの一二三の食べ方すればどんな病気でも治るのざぞ、皆の者に広く知らしてやれよ。心の病は一二三唱えることによりて治り、肉体の病は四十七回嚙むことによりて治るの座ぞ、心も身も分け隔てないのであるが、わかるように申し聞かしているのざぞ、取り違い致す出ないぞ。

（ひふみ、よいむなや、こともちろね、しきる、ゆあつわぬ、そをたはくめか、うおえ、にさりへて、のますあせゑほれけ。）

食べ物頂くときはよくよく嚙めと申してあろが、上の歯は火だぞ、下の歯は水だぞ。火と水と合わすのざぞ。かむろぎかむろみぞ。嚙むと力生まれるぞ。血となるぞ、肉となるぞ。」

読み解いていきましょう

目覚めたらその日の生命お預かりしたことを神に感謝し、（生命があるという状況は霊と肉体が揃っていると云うこと、霊は霊の霊とつながりその先は神とつながり、生かされていると云うこと。このことに感謝できると我の虫は湧いてこない、光りに向く）その生命を神の御心のままに弥栄に仕え祀ることを祈れよ。（自分の良心に沿い末永く神の歡びに生きることを祈れよ。）

神はその日その時に何をすべきかについて教えるぞ。（自分に迫り来る神からの宿題はその日その時起こり来る出来事である。）明日のことに心使うなよ（今この時この場に心を置き「古来日本では中今といわれました」それに心と身体を向けよ、そして良心の納得するよう動けということ）

心は配れよ。取り越し苦労はするなよ。（前にも書きましたが、取り越し苦労とは先の心配をすること、たとえば会社が倒産したらどうしようとか、今仕事がなく貯金がなくなったらどうしようとか、まだ起こってもいないことを思い不安になることはするな。心配りは忘れてはならんなれど、とは先々会社が倒産するようなことがあれば今の自分の仕事の中で何処の企業でも役に立てるスキルを身に付ける行動を取っている心配り、貯金がなくなったらどうしようかは、もしもの時に仕事を見つけて新たに稼げるまでの期間なんとか耐えられるだけの貯金をつくる行動を起こす心配り。）

一二三の食べ物に病無いと申してあろがな、一二三の食べ方は一二三唱えながら噛むのぞぞ、四十七回噛んでから呑むのぞぞ、これが一二三の食べ方ぞぞ。神に備えてからこの一二三の食べ方すればどんな病気でも治るのぞぞ、皆の者に広く知らしてやれよ（一二三の食べ方とはひふみ祝詞で数を数えながらの噛む食べ方でひふみ祝詞 ひふみ、よいむなや、こともちろらね、・・・と47音数えながら噛む食べ方、）食べ物は神に供えてからひふみの食べ方で食べるとどんな病も治るといっている。（おそらく霊の霊が物の霊を先に食べることで毒消しがなされるのかも知れません）

心の病は一二三唱えることによりて治り、肉体の病は四十七回噛むことによって治るの座ぞ、心も身も分け隔てないのであるが、わかるように申し聞かしているのぞぞ、取り違い致す出ないぞ。

すごいこと、を云っている ひふみ祝詞は下記です。

（ひふみ、よいむなや、こともちろらね、しきる、ゆあつわぬ、そをたはくめか、うおえ、にさりへて、のますあせゑほれけ。）唱えることで心の病が無くなり、47回噛むことで肉体の病は治る

食べ物頂くときはよくよく噛めと申してあろが、上の歯は火だぞ、下の歯は水だぞ。火と水と合わすのぞぞ。かむろぎかむろみぞ。（かむろぎ はイザナギの尊 かむろみ はイザナミの尊）火（か）水（み）ということ、噛むと力生まれるぞ。血となるぞ、肉となるぞ。（神産み、島産みですね） マツリですね火と水

・ ・ その17に続く

・・その17 ひふみ神示5 サブタイトル病気

「キが元と申してあろうが、キが飢え死にすると肉体飢え死にするぞ、キ息吹けば肉息吹くぞ、（神）の子は（神）のキ頂いているのざから、食うもの無くなっても飢え死にはせんぞ、キ大きく持てよと申してあろが、キはいくらでも大きく結構自由になる結構な（神）のキぞぞ。臣民利巧無くなれば（神）のキ入るぞ、（神）の息通うぞ、凝りかたまるとコリになって動きとれんから苦しいのざぞ。

日の出の（神）様お出ましぞ、日の出は、イの出であるぞ、キの出であるぞ、わかりたか。めんめめんめに心改めよと申してあろがな、人民というものは人に言われて腹の立つことあるものじゃ、腹立つと邪気起こるから、めんめめんめに改めよと、くどう申すのじゃぞ。」

読み解きます

キが元と申してあろが（生まれたとき先天的に与えられる韻リズム 8 個の父韻によって氣が流れるキの力 人間の創造力の元）キが飢え死にすると肉体飢え死にするぞ（生きる意志がなくなると氣の流れが無くなり肉体は動かなくなります。）キ息吹けば肉息吹くぞ（生きる意志があれば肉息吹くぞ）神の子は神のキ頂いているのざから、（直霊とつながるものキ）食うもの無くなっても飢え死にせんぞ、キ大きく持てよと申してあろが、（キ大きく持てとは意識を広げてそれを吸い込むと

同時に体の下肚の仙骨前に集約する) キはいくらでも大きく結構自由になる結構な神のキざぞ(自分の意識の広げ方で自由になる) 臣民利巧無くなれば神のキ入るぞ(頭で意識を広げるのではキは入らない、下肚で思うことでキが入る)

凝り固まるとコリになって動きがとれんから苦しいのざぞ。(凝り固まるとは動きが無くなること、氣の流れが無くなること、常にゆったり呼吸しているように流れがあることが大事)

日の出の(神)様お出ましぞ、日の出は、イの出であるぞ、(夜寝ているときは頭で夢を見ます。これは考えていることに近い状態氣の流れが起こりません。日が昇り生活のスタートが始まります。つまり意識が目覚めて父韻で言葉を思い行動に移します。氣の流れが起こります。だからイは(i)親韻 イザナギのイ(i) イザナミのイ(i)の現われなのでイの出なのです。親のおかげで父韻が動きます。

(8個の父韻は Ki, Si, Ti, Ni, Hi, Mi, Yi, Ri キシチニヒミイリ が動き氣の流れを創り、キの出でなのです。) わかりたか。めんめんめに心改めよと申してあろがな、人民というものは人に言われて(自分の不足を指摘されると)腹の立つことあるものじゃ、腹立つと邪氣起こるから、(腹立つとは幽界とつながること、その時は感謝の「ありがとう」を心でつぶやけば邪氣は消える)めんめんめに改めよと、くどう申すのじゃぞ

・ ・ その18につづく

その18

「どんなことがあっても不足申すでないぞ、不足悪ざぞ、皆人民の心からぞと、くどう申してあろがな、人民、キから起こってきたのざぞ、我の難儀、我が作るのざぞ、我恨むよりほかないぞ。

神は愛となって現れ、真となって現れるのであるが、その根はよろこびであるぞ。神の子は皆よろこびじゃ。よろこびは弥栄ぞ。じゃがよろこびのも正流と外流とあるぞ。間違えてならんぞ。正流の歓喜は愛の善となって現れて、また真の信となって現れるぞ。外流のよろこびは愛の悪となって現れるぞ。いずれも大神の現れであること忘れるなよ。悪抱えて抱き参らせて進むところにマコトの弥栄あるのであるぞ。神は弥栄ぞ。これでよいと申すことはないのであるぞ。大完成から超大完成へ向かって常に弥栄しているのであるぞよ。宇宙はすべてにおいても、個々においてもよろこびからよろこびに向って呼吸しているのであるぞ。よろこびによって創られ、よろこんでいるのであるぞ。故によろこびなくしては生きないぞ。合一はないぞ。愛は愛のみではよろこびでないぞと申してあろう。真は真のみではよろこびでないぞと申してあろが。愛と真と合一し、キ(父韻の働きが始まる、つまり生まれ出て)するところに、陰と陽と合一し、弥栄(呼吸)したところによろこびあるのぢやぞ。

病、ひらくことも、運、ひらくことも、皆己からぢや、と申してあろう。誰でも、何でもよくなるのが神の道、神の御心ぢや。親心じゃ。悪くなるということはないのぢや。迷いが迷いを生むぞ。もともと病も不運もない弥栄のみ、よろこびのみじゃ。神がよろこびじゃから、その生んだもの皆よろこびであるぞ。この道理よくわきまえよ。」

では読み解きます

どんなことがあっても不足申すでないぞ、不足悪ざぞ（何があっても影を見るのではないぞ、影は悪だぞ、つまり光り＝善の反対）、皆人民の心からぞと、くどう申してあろがな、人民、キから起こってきたのざぞ、我の難儀、我が作るのざぞ、我恨むよりほかないぞ、（生まれ出たとき父韻が働きキが動き始めます、そのおかげで体を動かすことができます。父韻の動き方は自分の心の思いが創ります。光を見れば真善美愛を創り出し、影をみれば偽悪醜憎を創り出します。全て自分の心の働きです。）神は愛となって現れ、真となって現れるのであるが、その根はよろこびであるぞ。神の子は皆よろこびじゃ。よろこびは弥栄ぞ。（神の歡びが光となってキ真善美愛となって現われると云っているのでそのままです。喜びは弥栄とは喜びというのは永遠に続くもの、愛だけ真だけではそうはならない）

じゃがよろこびのも正流と外流とあるぞ。（喜びにも正流と外流とあるぞとは、正流は神界からつまり天＝直霊＝良心からの氣の流れを受けた喜びであり、外流とは幽界つまり人間が欲で描いた思いのバイブレーションの層から氣の流れを受けたもの）間違えてならんぞ。正流の歡喜は愛の善となって現れて、また真の信となって現れるぞ。外流のよろこびは愛の悪となって現れるぞ。いずれも大神の現れであること忘れるなよ。

悪抱えて抱き参らせて進むところにマコトの弥栄あるのであるぞ（悪を排除するのではなく、抱いて参らせ進むところにマコトの弥栄あるのであるぞ。）

神は弥栄ぞ。これでよいと申すことはないのであるぞ。大完成から超大完成へ向かって常に弥栄しているのであるぞよ。（永遠に続いているのである。）宇宙はすべてにおいても、個々においてもよろこびからよろこびに向って呼吸しているのであるぞ。よろこびによって創られ、よろこんでいるのであるぞ。故によろこびなくしては生きないぞ。合一はないぞ。（もとはよろこびなのだ、そこに喜びあるから呼吸しつづくのである、喜びなくして生きないとは、喜びが生きる元と云っている）合一ないぞ。（霊と肉 心と身体 神と人 合一は喜び無くしてないぞ）

愛は愛のみではよろこびでないぞと申してあろう。真は真のみではよろこびでないぞと申してあろが。（キ真善美愛が揃って光りになり神の歡びになる。愛だけに生きるとか真実だけに生きるは間違っていると）愛と真と合一し、キ（父韻の働きが始まる、つまり生まれ出て、直霊＝良心に従い生きることが）するところに、陰と陽と合一し、弥栄（呼吸）したところによるこびあるのぢやぞ。

病、ひらくことも、運、ひらくことも、皆己からぢや、と申してあろう。誰でも、何でもよくなるのが神の道、神の御心ぢや。親心じゃ。悪くなるということはないのぢや。（すべて自分の心の問題である。心が光りに向き常に自分を省みて、また光りをみて進むなら病も不運ももともとない弥栄のみ、喜びのみであると云っている）迷いが迷いを生むぞ。もともと病も不運もない弥栄のみ、よろこびのみじゃ。神がよろこびじゃから、その生んだもの皆よろこびであるぞ。この道理よくわきまえよ。

その・・19につづく

「表ばかり見ているからわからんのじゃ。水晶の心なれば三千里先のこともありやか。人民というものは奇蹟を見ても、病気になっても、中々改心できんもんじゃ。それは外からのものであるからぢゃ。まことの改心は、中の中の、のキ戴いて、ホッコンの改心出来ねばならん。死後の生活知らすことはよいなれど、それのみによって改心せよと迫るのは悪のやり方。奇蹟を見せ、病気を治してやるのもよいことじゃが、それのみによって改心迫ってはならん。それのみで道を説いてはならんぞ。そんなことぐらいでマコトのホッコンの改心が出来たらば、人間はとうの昔に改心して御座るぞ。今までのような宗教は亡びると申してあろうが。亡びる宗教に致して下さるなよ」

読み解きます。

表ばかり見ているからわからんのじゃ。(現れ出ている世界ばかり見て居るからそれを変えよう変えようとしているから判らないのである。直霊とつながれば千里眼にもなる。)

水晶の心なれば三千里先のこともありやか。人民というものは奇蹟を見ても、病気になっても、中々改心できんもんじゃ。それは外からのものであるからぢゃ。まことの改心は、中の中の、のキ戴いて、ホッコンの改心出来ねばならん。(水晶の心とは自分の我を取り去った直霊の心であれば、先のことも判る。人間は奇蹟を見ても、病気になっても、なかなか自分の心の原因だとは思わないのだ。自分の心の向け方を変えようとししないのだ。) 本当の改心とは、(直霊からのキをいただいてその動きに任せること)

「死後の生活知らすことはよいなれど、それのみによって改心せよと迫るのは悪のやり方。奇蹟を見せ、病気を治してやるのもよいことじゃが、それのみによって改心迫ってはならん。それのみで道を説いてはならんぞ。そんなことぐらいでマコトのホッコンの改心が出来たらば、人間はとうの昔に改心して御座るぞ」外から死後を見せたり、奇蹟を見せたり、病気を治したりで改心を迫ってだめだ。自分の中の直霊に気づき直霊と和合して本当の改心出来る。

その 20 ひふみ神示 5 病気

「病あるかないか。災難来るか来ないかは、手届くか届かないかで分ると申してあろがな。届くとは注ぐことぞ、手首の息と腹の息と首の息と頭の息と足の息と胸の息と臍の息と脊首(胸椎 1、2 番当たり)の息と手の息と八か所十所の息合っていれば病無いのざぞ、災難見ないのざから、毎朝神拝みてから克く合わせてみよ、合っていたらその日には災難無いのざぞ、殊に臍の息一番大切ざぞ、若しも息合っていない時には一二三唱えよ、唱へ唱へて息合うまで宣れよ、何んな難儀も災難

も無くしてやるぞ、この方おほかむつみかみ意富加牟豆美神であるぞ。神の息と合わされると災難、病無くなるのざぞ大難小難にしてやるぞ、生命助けてやるぞ、此のことは此の方信ずる人でないと誤るから知らすでないぞ、手二本足二本いれて十柱ぞ手足一本として八柱ぞ、此のこと早う皆に知らしてどしどし安心して働くようにしてやれよ。飛行機の災難も地震罪穢れの禍も大きい災難ある時には息乱れるのざぞ、一二三祝詞と祓え祝詞と神の息吹きと息と一つになりておれば災難逃れるぞ、信ずるものばかりに知らしてやりてくれよ。」

読み解きます

病あるかないか。災難来るか来ないかは、手届くか届かないかで分ると申してあろがな。届くとは注ぐことぞ、(手届くか届かないかでわかるとは、届くとは注ぐことぞ。とは氣の流れのこと簡単に言えば呼吸のこと、自分の仙骨前に、広げた意識を、集める。そこの中心が呼吸すると意識する。その呼吸を各箇所を通して確認する。その時そこの箇所を通して呼吸出来ると息が合っているということ)

まず毎朝神拝みてからとは神に感謝の言葉をのることはキの方向を光りに向けることになります。

その状態で呼吸が出来ているかどうかを確認するのですが、心を鎮めて (意識を仙骨前に集めて) そこを通して呼吸してみる、とそこで呼吸できている流れを、感覚的に感じる(超五官)ことが出来ればOKということ。

「手首の息と腹の息と首の息と頭の息と足の息と胸の息と臍の息と脊首(胸椎1、2番当たり)の息と手の息と八か所十所の息合っていれば病無いのざぞ、災難見ないのざから、毎朝神拝みてから克く合わしてみよ、」

(すごいこと云っています。呼吸を全てのところで感じる事が出来れば病ない、災難ないとい

っている。) この方おほかむつみかみ意富加牟豆美神(イザナギの尊が黄泉の国「暗闇の世界」から逃げ帰るときに、黄泉の軍勢に投げつけて、救われた桃の実、のことを指すようですが、桃の実が自分を救ってくれた、人民も同じように救っておくれと云われたので、これは暗闇の世界から救う=光りの世界=天照らす世界=天照大御神のこととあります。)であるぞ。

神の息と合わされると災難、病無くなるのざぞ大難小難にしてやるぞ、生命助けてやるぞ、此のことは此の方信ずる人でないと誤るから知らずでないぞ(この宇宙のバイブレーションはもともと存在していて動きがない、アイウエオこれを母音と呼んでいます。そこに意志の働きが起こり、チキミヒリニイシと父韻のリズムが母音にかけ合わさって光りを放ち言葉が生まれてきました。つまりもとは暗闇、そこに光りが現われ今のこの世界が出来たのでしょうか。その光りこそが全ての原点、光り=太陽=天照大御神 光りに向けということ)

ちなみに暗闇は月夜見の太神が支配する、芸術、音楽、哲学、宗教、頭の中で考えを巡らす世界、実際には、ものを生まない闇(頭の中の)の世界と言うことです。大国主の神、(出雲の神=つまり雲現われた神=母音と父韻が働き始めたこと)次に、ひるこの神、えびす神、事代主の神(言葉を宣るとのキが動き、氣の流れ)となって行動が伴って、(大物主の神)ものが創造されるということでしょうか

ひふみ祝詞は石上神宮(奈良に残されたようと言霊の運用法を示したものと古事記と言霊にあります。島田正路氏著 ちなみに言霊を祀るのは伊勢神宮内宮です。外宮はそれによってできあがった世界の文化(イザナミの世界つまり言霊で出来た音の体をもつ靈の総て)を祀っているとあります。)

ひふみ神示5 サブタイトル病氣

以上